

層 雲

昭和22年8月

第35卷第2號 (通卷407號)

種

井 泉 水

けふ、はじめて今年の朝顔が咲いた。垣からませて、自然咲きにしたものだが、紺青の色が濃く、あざやかに、かなり大輪のものが咲いた。手は掛けなかつたけれども、種が好いからであらう。此の種は、故、金子露郷からもらつたものだ。かれは、朝顔の大輪作りに熱心であつた。私も、朝顔の變り咲は嫌ひで、大輪が好きなのだ。露郷の存命のうちには、毎年、種をおくつてよこした。去年は、私が種をとつておいた。かれは歿しても、此のうちの朝顔を見ると、かれをおもひ出すのである。

アメリカ、デングアの徳永田芥子から、アスパラガスの種をおくつてきた。アスパラガスは食用として香りの高い、うまいものだ、これを鉢植にすると、鑑賞にも足りる。浅い緑色をした其の葉は、線香花火のやうに、細くてこまかくて、あるかなきかの微風をも感じてゐるらしく、いかにも涼しい草である。私は之を畑にも蒔かうけれども、鉢にも蒔かうと思ふ。

種といふものは、生命の種である。それは古今、何百年何千年をも貫いて、その生命を傳へる。芭蕉が「朝顔や晝は錠おろす門の垣」と見た、その朝顔の種を若し毎年取つては蒔きしたならば、今でも、その朝顔の色をソツクリそのまま眺めることが出来たのではないだらうか。

種といふものは、生命の種である。それは東西何千里を隔てても、その生命を傳へる。太平洋を越えて、アメリカの然かもロッキイ山中の一都市に生ゐるアスパラガスが、此の鎌倉の私の小さな菜園にも、青々とその芽を出し、葉を出すであらう。其事には理窟も何もない、世界は一つだといふ心、それは神の心を感じさせる、と云つてもいいのではないか。

四 攝事

荻原井泉水

中學校の「國語」一年級の教科書の第一課に「愛語」を説いた文章がある。此頃の世の中、人と人との接觸がつかめたく、とげ／＼しく、東京の言葉で云へばつづけん、どんである。これは慳貪といふことだらう。つひ、心ならずも氣持が尖りがちになる心理は解るけれども、之は殊に警めねばならぬ事である。お互に「有難う」「済みません」「御苦勞さま」と云ふ、たゞ一寸した言葉がどれだけ、人の氣持を和らげるか、其徳は甚だ大きい。これ「愛語」の徳である。愛語といふことは、佛道にて教へる菩薩行四攝事の一つなのである。

四攝事の他の一つは「布施」即ち物を施すことだ。此原語には捨施と云つて捨てるといふ義がある。自分の持つてゐる物に執著せず、其を他に轉じて廣く利生厚生の道に資することだ。明治時代の美しい語であつた（但し、少しく思ひ上りの氣持もあつた）慈善といふ氣持ではなく、他人の足りない所を己れの持つてゐる物を以て補ひあふといふ事、これこそ「布施」の解釋であらねばなるまい。

も一つは「利行」即ち他の爲に利する行をすることだ。道端に落ちてゐる邪覺な石ころをせつと取除いておくことでも、坂道に上惱んでゐる荷車の後を押してやることでも利行である。事は小さいけれども、其が人の心を和らげ、協力の種を植ゑる其の徳は小しとしない。

も一つは「同事」即ち他と共に同じ事をする事だ。或地方の郵便局長が時々、集配人と伍して自轉車で配達をする、局長は中心たる椅子にかけて監督してゐる方が本當だらうとも云へようが、他の者と同じ事をするといふことが従業員に與へる感化は少くあるまい。凡てに此の心構へあることが「同事」の徳である。

當今、凡ての人の日々の心構へとしなければならぬ事、又、自分の座右の銘としなければならぬ事として、私は此の四攝事を掲げたい。普く知られてゐるものではあるが、まだ知らぬ方もあらう。委しくは道元禪師の「曹洞教會修證義」第四章、發願利生のところを参照されたい。

衆生ヲ利益スルトイフハ四枚ノ般若ナリ。

一ニハ布施、二ニハ愛語、三ニハ利行、四ニハ同事。コレ即チ薩埵ノ行願ナリ。

小言

「人間は考へる慮である」と云ふが、此の満員の電車の中で、彼等は何かを考へる餘裕があるかどうか。——「人間は折れない蘆である」こんなには押されても、揉まれても……である。

「動」あるがゆえに「反動」あることは物理學の公理である。押すから押される、押されるから押す。これは道義心とかいふ倫理學上の問題ではなくして、一定の空間にそれに適當量以上の人間が詰め込まれてゐるための物理的現象である。

一國といふものも亦同じ、日本四つの島には、おのづから、其の定員といふものがあるはずである。

混雑してゐる汽車の中で、しやれた車掌がこう云つたものである。「みなさん、脚元に荷物を置かないやうにして下さい。脚元は足を置くところですから……」

「目白押し」といふ言葉がある。「さざ立ち」といふ新語がありさう。——井泉水

眞葛が原

荻原井泉水

机に 明けやすき 鳩が鳴く 東山を 東に
東山は青くて 雨の音になつてゐる 雨
机にもろうてある 封筒びんせん 青葉 けふは雨
きうりと とびそうな 海苔の 四五枚の 朝げをおわり
宿のゆかたで 朝は 新聞の うらと おもて
つゆけく 掃いてゐる 花と あかと もつて通る つゆのくもり
つゆぐもりの もゆるやうな花 さげた人は 墓へ行く

清閑とは かとりせんこうと 猫と 暗い山がある
おばさんと 猫と あぢさいと 其宿に寝とまりする
豆つんで 豆の花 おばさんと よその子雨はれてゐる
おばさん ぞうきんかけて 古い家 あさゆふ あぢさい
學生さんひとり おばさんひとり あぢさいさかり
涼しく 山ありの 来てあそぶ 机はかりて四五日
花は かえて 南天のはな つゆが まだ ふりそうな

旅にもつ たび はいて梅雨は 竹林にふる
雲の ゆきさの あぢさいの はれまの ちよつと出る
やどの やぶもちの花 梅雨はれの東山 西目になる
にわとこ 赤い寶 小鳥がきて けふはわたしがゐる
つゆけし 下駄はかりて えんびつ 手帳 かるくて あるく
眞葛が原は いまも 葛の葉の 山陽外史へまいる

添へ書

「東山雜記」に書いたことがそのまゝ、此の「眞葛が原」の自註になつてゐるようから、その上に何も書かない方が好いのであらうが――

「清閑とは」といふ句は、芭蕉の「嵯峨日記」をもつて味つてもらひたい。「嵯峨日記」には

元祿四年、辛卯月十八日、嵯峨に遊びて去來が落柿舎に至る。凡兆ともに來りて、暮に及て京に歸る。予は尙暫くとどむべきよしにて、障子つゞくり、むぐら引きかなぐり、舎中の片隅一間なるところ、臥所とさだむ。

机一つ 硯 文庫 ……………
夜のふすま調茶の物ども、京より持來て、貧しからず、我、貧賤を忘れて、清閑をたのしむ。

右のやうにある。芭蕉の眞似をする氣持では勿論無く、却て、芭蕉をはんばつするものを出したい。そんな氣持から「おばさん」を取材して、これは決して元祿ではない、現代だといふことをしつかりと出さうと試みたのである。

麗日壇

井泉 水選

大越吾亦紅

池原魚眠洞

秋山秋紅蓼

春の日音して春の火燃ゆるにまかせ
 春の日晝室へ通されて居りお茶をいた
 春の霜がけさよらはれた空わがやと
 はやしのなかにひとをる春蘭掘つて
 男ひとり女ふたり春の山ゆくいた
 春の日うづくまり話すことにはと
 ことたつまるんこにふくれふる
 ふるさとは長押に提灯箱なんとい
 明るい月夜は雪の山川ふるさと
 つらら朝は女何かと味噌蔵に出入
 ゆびがこしらへてあるあかざれだ
 雪のしづくがリズムになる句のリ
 子ども四五人山のそば秋をうた
 松は大きく夕かげのすがたをもち
 竹むらぐれてくる二三軒人が戻
 木をきる音が林の中ちがづいて
 夜番ひとまはり月夜の路がまが
 木の月夜人の月夜あなるいか
 草ばかりが瀬の音

芹田鳳車

東山雜記

井泉 水

いま、私は京都に来て、自分の机（それはカリの
 ものであつても、其上に自分の物を取りちらして、
 自分だけが使ふもの）の前に坐つて、東山を眺めな
 がら、原稿を整理したり手紙を書いたりしてゐる、
 かういふ気分は二十年ぶりのことである。このこ
 ろ、私は自分の「仕事」といふものを「樂み」の中
 にかしこむといふ氣持であるので、こんど京都か
 ら、私のための書齋を用意しておいたといふことを
 聞いて、それでは久しぶりに山を眺めながら仕事
 をすることが出来ようと、その事を樂しみにして、
 やつてきたのである。その書齋といふのは、圓山公
 園の南隣にある眞葛が原といはれてゐる、昔の名所
 一昔はその邊に菊が多くて「菊溪」といふ風雅な名
 がついてゐる中の、菊溪亭といふ家で、今はおばさ
 ん一人が住んで、手が少いので、このごろはメツダ
 に客もしないでゐるといふ其家の一間なのである。

×

私は六月廿二日の夕方に京都に着いた。それから
 月を越えて七月一日まで、菊溪亭にゐた。毎朝、う
 ぐひすが鳴いた。二十年前、私が橋畔亭に住んで居
 たころ、明けても暮れても東山にむかつて、机にす

二階へ蟻が階段をのぼる
春の雨ふり殊にしづかに止んでゐる
満開の枝も枝のあいだも雨ふる
風がやんで遠くへ行つて吹いてゐる
日がさせば弱い日がさしきさすなる
青葉も東山に棲み雨ふると雫する
かぼちやへちまひようたんも同じ青きにぬれてしづく
子供はだして桑の實はたべてたつしやで
蘆蓼の中出でて蓼笛ふいてこちらへくる少年
夏めく雲のゆききもさくらんぼうの高枝の色づきよう
夏の日底に岩の透く涙のうへ釣る
月夜の蓼の芽であり海でありしづかな
よいねがほの五人の親としてびんぼうしてゐる
幼くこんなかるい箱の中のお父さんをつかり持つてゐる
横になつて蓼がのびる病人
海ばかりみてゐて云ひそびれてゐる
ぼくとゐて女はことばすくない日傘のうち
木に雨ふつておやしるの中にある太鼓
よその二階の灯と樹のかげと約束のじかん
低いところにみえてわがいへ窓があいてる
山際白く梅の花が關ヶ原へと昏れかかる
丸い月が出て井戸の廻りの木今日立春
枝かげ寒のぬくい弔問客の名刺受
天高く引越荷物へ乗つてゆく
白木椏咲きつづき今日から冬服にして出る

林 木衣樓

田中井夢

岡野宵火

渡邊さとり

わつてゐた。そのころ——

鶯鳴く一つをるらしよげふも鳴く

此の句にあるやうに、うぐひすが毎朝鳴いた。たつた一羽があるだけと見えるのが、かならず朝鳴くのだつた。——あゝ、そのうぐひすが今もやつぱり居て、やつぱり鳴いてゐる、と思はせるやうな。……それから時は移り、人は去り、私も年をとつただけけれども、東山はやはり昔通りに青いのだ、さうしてこれから更に二十年の後になつて、私はもう此の世に居なくなつても、東山はやはり此のやうに青く、うぐひすがやはり此のやうに鳴いてゐるであらう……さう思ふと、だからこそ、それでいゝのだ、とほゝゑましいやうな氣持もするのである。

×

菊溪亭のすぐ下が西行庵、そのすぐ下が芭蕉庵である。西行庵といふのは、昔、西行が双林寺の支院なる祭園といふのに住して、そこで歿したといふ、その祭園の跡に建てたる、西行を記念する庵である。こゝには又、西行の昔には、阿彌陀坊上人といふ念佛行者の庵室があつた。芭蕉はそれを懐しがつて——

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

と詠んでゐる。下、芭蕉の後に、芭蕉を記念するために建てられたのが、芭蕉堂なのである。芭蕉堂は、今日も好事者の尋ねる者が時たまはあると見え

船本月々虹

木村縁平

古林巴水樓

和田光利

佐々木石々

飯尾青城子

小倉圓平

江良碧松

日に日に羊齒の葉のはぐれて温泉へバスが通る
 春へ 離子少しあけて 針坊主の針
 雪ふりやんで硝子のぬけた窓から日のさしてゆく汽車
 ともつて提灯雪深くなる みちゆく
 ひるはせみのなく木に夜は月のかげのあるばん
 影も秋になつてゐる木がいつぼんたつてゐる
 月がよあけてからものこつてゐるはなしのさき
 蚊帳にはいつてからも月がうごかしてゐる柿の葉
 朝ぐもりのちぎつた後の茄子のはな
 ちよつとのま留守にしたらしい木斛のかげが壁
 藁屋を煙が離れない紅葉はいつまでもちらない
 秋晴のつちの音、遠く杭を打つのが見えてゐて
 こんな青い鯖ぶつたぎりにしてもてなしてくれる
 雪山をそびらに嚙伯のしづかなる筆のうごき
 おとした針もきこえまうな深雪の夜をつまとゐる
 とじまりいへば小言のようで冬月さしてをる
 山の幸は先づあけび口に してゆく
 千本しめぢに大根おろし 秋たのし
 からす雪へ下りてをるやがてくらくなるその時刻
 いまははたけなら雪から豆の葉（放哉生家跡）
 水は日夜をながれ 水にたつ杭とで秋
 藪にやぶこうじ 拔道があつて寒作爺さん
 梅が通さん坊に腕を張つて別荘番のおやぢ
 日本再建座談會といふ窓に山が骨ばつて寒ン
 落 日、水 平 線 が も り あ が る

る。御用の方は門をおたき下さい」と門に書いてある。西洋風の呼びリンではなく、又、お寺風に木のハンなどをさげてはおかずに、門の戸をコブシをもつてたゞかせるのは古風である。「おうく」と云へどたゞくや……」といふ趣なのだらうと思ふ。

×

私は毎朝、わりあひに早く起きて、そのあたりを一時間位散歩した。すぐ上の東大谷では、寺男が二人でかならず箒をつかつてゐた。境内にはうつくしくミカゲ石が敷いてある、落葉もないころの、その石の上を一片の塵もとどめないやうに掃き清めてゐるのだ。かういふところは、京都だからだとおもふ。環境と傳統と——そして經濟的の餘力とがそろさせるのである。私は大谷の門内を通りぬけて、長樂寺へのぼって行く。長樂寺はいつも門をしめてあけるけれども、その横のくゞり戸の中に、將軍塚へ行く公道が通じてゐるのだから、遠慮なくはいつて行く。此の登りの道はいゞ。長樂寺の本堂の上に、頼山陽の墓がある。コンクリート作りではあるが、今は時代がついて苔さへもついてゐるし、うしろなる橋が棧道のやうに、谷にさしかけてあつて、外史橋と刻してある。このあたりの青葉の木立が大そう美しい。いつも小鳥が鳴いてゐる。墓を作るならば、かういふ所が理想的だと思ふ。

×

辭表は一身上の都合でかたつむりものつき白の、いつまでも音、いなか屋敷あと大根畑になつてゐても朝日おそくさして松の木秋である海があるとほくである松笠落ちてゐるのも小さな土饅頭ではある長い短い声の芽あたたかい物乞ひ旅のもんでといふ春浅い垣の柴海から海の匂ひも秋あけきらぬうち家を出る雞二三羽とこすもす一本みんなおるすす(吾紅居)秋の日みちのくは金色の黍の穂を刈る當落は風が持つてくる町の風は花ちらしてゐる青葉に雨穴ほる人に傘さしかける村葬の靈思ひ思ひに歸り行く遠山の雪川二つ越えると淀の竹藪と桃と見ゆ畫布に繪になる明るい森のみどりと池が顔のまへ巖山へ行く道と峠一つ越す子がひとり松は磯馴れの砂濱にお社海向いて早春道が川のふちに出たところで麥の芽の畑さむい海になつてもうてかえつてくるこどもの海の波山に出る日の日のさしてゐるときが紅葉おんどりめんどり山の家まへ夏の雨の上つてゐる道雪解のかげがふいてゐる藏のかなあみ窓かち屋のふいごの青いほのほ春のゆうべのあられすうめに朝の日はあたたつてゐて登校どきのことどもらたねいもたわらよりころがりいでてゐる

山本木天藝

柳田流矢

佐藤露江

淨心寺 惺

小谷信夫

井手逸郎

藤澤せいじ

私が机の前にすわると、俊二はさつそくに層雲の句稿の一束を持つてきた。八月號の原稿になるべきものだつた。これをこゝに居るうちに選しなくてはならない。白井書房の主人がたづねてきた。私の隨筆集「春は曙」の校正が出来たのだ。これは芭蕉に關する隨筆で、芭蕉二百五十回忌の後に出来るべきものだつたのが、かれこれして今日になつたもの、さうして用紙事情の切迫した現状のもとで、とにかく世に出さうといふのだから、これも早く校正を見なくてはならない。木衣樓が俳句大會の準備に就て、いろ／＼と打合やら報告やらに來る。卓郎が來る。仙醉樓が來る。平一郎が來る。草史朗が來る。小平が來る。亭のおばさん、お茶をいれるのにいそがしい。

X

ある日は、先斗町の川添いの家で、白井書房主催の座談會があつた。新村出氏、穎源退蔵氏と鼎座漫談であつて、談の種は東西にわたり、古今に通じて泉のごとくに盡きず、かういふ會が私にはいちばん楽しいものである。それに、かういふ會は、鴨川の川風を納れながら、つめたいビールを飲みながらといふことに、話のおもしろい糸口がみつかるのである。さきごろ、天皇陛下が京都御ちうれん中に御所に於て、陛下を圍む藝術的の座談會といふものがあつたが、其の場の空氣が鬱鬱であり、皆椅子にか

かきぬすみした子を入れてかへる

松尾敦之

汽車から見えて青んでゐる蔘が私の家のあと
しようじのあなの木が芽がいちめんあめ
しまひぶるの、空には春がいつぱい

ふきのとうひさびさひとりの父にもどり
春の川浪ひるがえる上を汽車で通る毎あさ
焼け残つた物はこれだけの生活にまた春が来た

小澤武二

波のかたみに乾く川砂が春のたそがれごろ
汽罐士くわえぎせるで菜の花がまつさかり
きようは灌佛の櫻が咲いてゐる寺が線路のそば

浪音が須磨、驛の停つてゐる時計に灯がはいつてゐる
お盆の墓まいりには子と赤い切符が一枚と牛まい

堀英之助

原子爆弾あの日のこと、雲の峰に水うつてゐる
親一人子一人のその親にもどつてたくまじ

今夜乗る切符がある橋の下舟の生活がある
流れてゐる水がつばめ來てゐる今日の空

井上充夫

ちらばつてゐる灯がかたまつてゐる木と暮れるはつ夏
虹になつたり雨になつたり街なかもめよく木
枝が小枝がふんすいである空がめぶくまへ

木戸夢郎

月から出てゐる道がこちらへ來てゐる
橋を渡ると桶屋床やがあつて村になる梅
石がすわつてゐる木の芽はつはつ伸びてゆく

財馬阿歩

朝ははれて好い雨でしたおいとまする
ほんに花曇りの屋根をあるいてゐる鳩
山は早や靄をしづめて三日月が月になる

けて、下を向きがちで、話題は一ころにはづまなかつたとは、其時、出席された新村氏の談、さもあつた、そんなことである。

×

ある日は、若い人達と東山吟行の會をもようした。高靈寺の下を通つて、三聖坂をあがつて、清水寺に出る。池のあたりのツツジは既にあせたけれども、かへではまだ新緑のあざやかさを失つてゐない。音羽の瀧は昔ながらに細々としたまゝ、涼しい音を立てゝゐた。そこから小松谷へ出る道は、私も忘れてしまつたし、京都の人たちもめつたに來たこととが無いと見えて、たづね／＼しながら行く。圓光大師の山門の屋根が見えて、遠くで松蟬の鳴く聲がする。そこから日吉神社への道は、家並の中へはいつて行くし、晝ちかくして暑くもなる。扇片手に、句帖と鉛筆とを片手に、ラクではない。蛇が谷から銀の宮に出る。毎夕、錢湯へ行くにも、しじう歩いてゐた道だから、これはまざれがない。此のあたり、二十年を経てもさつぱり變りがない。橋畔亭はみんな知らないといふので、私が案内した。水の音、青葉、こゝも亦、昔の通りである。圓通寺橋の上に立つて、橋畔亭を眺めて、みんなが——「いゝところですねえ」と感心する。放哉や、裸木や、この橋の上に立つて、涼んだり、冗談を云つたり、句を拾つて行つたりした、それらの人がヒョッコリと

あかときかまどたく火のあかあかと媼の顔
こがらし、夢であえばみんな達者な
すでに山畑の麥の芽の牛の牛のこえ

内島北朗

山の家とんがらし、ス雨の中を行く
スピーカーの云ふことを聞いてゐる落葉
竹の葉冬陽のあたるぞうりはく

三好草一

夏山の雲も、昔の歌のオルガン弾いてゐるので
洗濯物に誰もゐない朝日を美しと思ふ
廣いたんばの霧がはれてくるなでしこを一本探つてゐる
二三日忘れてゐたような空があつて夕べの葉がふる
海風青桐二三本青淵といふに涼しく降り
八月、川に長い橋川に裸の子みちに蓼干す
一日吹いてふいてくれると靜かに星を出してゐる山
青田のいろも、日のみちたらひたる田水のおとも
青田、はいる方の山にいまはいる日が青田にさしてゐる
石、月から照つてゐるひかり
月の道つた空に起き出る
林の奥もぬれてゐる
松のあらい葉に海にあめ
月夜あかるくなつてきた石
藤棚の藤の葉が黄色になるほどの日の中でテニスする
さつまいも賣つたその家で茶を入れて出した茶碗が三つ冬日に
いつもはいりに行くお湯屋の庭の雪の下の日蔭である
水の中に居つて餌をほうつてもらひたべるのである魚紋である
女が木犀匂ふといひ男にも匂ひそらして歩いて

池田詩外樓

近木黎々火

吉澤稻市

顔を出しさうな氣がした。橋畔亭から、今熊野の觀
音へ、これは毎朝、私が散歩した道、椎の花の匂ふ
細道である。泉涌寺の寺内は、今もきよらかになつ
てゐたが、歴代御陵の管理など、宮内省の豫算がき
りつめられた將來はどうなることかと案じられもす
る。一同は、泉涌寺門前から電車で歸り、眞葛が原
の左阿彌で、途中の所得を披露した。

橋があると橋の名、道がまがつて水の音又橋

俊二

先生二十年まへの記憶が青葉の細い道である

同

青葉山みち行くには鳥鳴きいろくに鳴く

泰山

路のべ雜草の花さき路をゆくにふますに行く

同

歩くに汗ばむころや青柿のおちるころやの雨

木衣樓

夏うぐひすが鳴いてから又鳴くのであるく

平一郎

女脱いだきものきてゐる瀧には青い葉の散り

井泉水

行くに椎の茂りひとりは口ぶえふいて行く

同

昔からの指さしが今熊野へ、今もうぐひす

月夜の芽ふいたばかりの音が折れとる
 椎の木立雨はれる觀世音寺いらか見えて鏡のなる
 花をみるでもなくふるぼけたネクタイ春のゆく
 雨晴の山なみ劃然わが思ふことあり
 朝日かぼちやの花いよいよ曇くなる
 ねるとき白い雲の月のさしてゐるこのへん竹林
 浪が岩に月夜が花を散らせます
 雪深い日ざしが海のあるこの町の教會の窓のオルガンです
 ねぎのにえるにおいをゆきのふるばん
 すつかり春めいて池のまわりの道がある
 木の芽がひらく塀のそとつきよ
 星が大きな木がゆびさしておしえてくれた
 石に芽がでるありご穴からでとる
 さかなのひかりなみに一びき
 月が出るころの道行く夢は穢にでてゐる
 永い日まだ暮れない寄宿舎のまわりの菜園
 けもののかたちの雲や寒い月が家の空
 山の松山の竹冬が晴れてしづかな
 ゆきやむとゆき明りして戻つてきた
 雪が音なくつもつてゐる夜のふすまのつばき
 かがしの顔もお月夜で通る
 月夜が雨になる刈り田のかふ
 もら夏の夕日のかがやく海が川口
 青梅、六時の日がまだあつてお針子さん歸る
 波音まけてゐる雪の中雪みちまつづく

三宅酒造洞

小牧二郎

品川幸一郎

佐藤仙水

積木晃楓

角田重信

原田赫城子

内久根聖己

三浦香女

田中星々

小林不未鳴

南川鴻亮

増村辰郎

井泉水

青葉この道とおもふて行くに行けてこの道

青葉さいせんばこ、音のするせにをおとす

山の青葉とはなれてかえでの一木、佛前

X

同

或日は、御所を拜觀した。空襲のはげしかつたこ
 ろ、炎燒の氣づかひから、回廊をみな除去してしま
 ったので、疎開の跡といつた觀もあつて、いさゝか
 サクサクを感じもするが、建禮門の中、承明門を前に
 して、紫宸殿の前に立つと、こうくしき空氣の匂
 ひがする。左近の櫻、右近の橋も青々としてゐる。
 但し、近頃は靴をはいた外國遠來の客に便するため
 に、四面九級のキサハシには板を敷いて、土足をも
 つてヒサシまで上り得るやうに直してある。中古、
 此の殿上にのぼることは、高官の者にかざられ、其
 故に「殿上人」といふ稱呼があつた時代のことを考
 へると、感慨にたえないとも云へようが、それだか
 らこそ無位無官の小生ごときが、時をもらはばすし
 て、マケくくと、賢聖障子などを觀賞することが出
 來る仕合せともなつたのである。紫宸殿についで
 清涼殿がある。晝御座と稱する陛下の御座所も、ま
 じかに拜せられて、吳竹漢竹の晝の竹の晝にそよぐ

この村のげやきの梢の雪空が青空になる
 陽がさしてきておひるの物がにえてある樺火
 雪のまだらに浪よせてからすがあるく早春
 すこし時間があるので驪のそらは芽ぶいてある
 櫻若葉もう學校へゆくようになつて退けてくる
 陽のとどく海草ゆれてゐる
 小鳥葉の下に來て日のくれ
 手のひらひらいてみせてゐる木の芽
 貝塚はこの邊らしく貝がちつてゐて家が一軒青麥の中
 くさぐさかぜあるくさのなかはなのみえてゆく
 まる顔のよいむすめさんになつて馬と働いてゐてふるさと
 軒先どこもアメリカ文字に春の行く花がらる
 麥の穂たそがれ五六人話してゆく
 ふいて雪げ風の戸をならすほどな、ゐる
 子供ら裏山笹笛椿笛の雪げ
 みんな眠つてゐる私の月夜となつてゐる（清作）
 體溫計、お客が歸つてからの日くれるまへ
 一枚はをつて匂を作りませう庭のりんどう
 白菊へしみ入る月の光を感じ病んでゐる
 秋晴けふも暮れてゆくハマから遠い富士のあたま
 無電塔のさきにカシオペア座が來てゐる秋が來る
 木が雪つけてしづかな日和で薪割つて奥さん
 正月の餅も配給のものいたゞいて白髪になつてゐる
 鳥に追はれる虫の命を見てゐるばかり曇いばかり
 青いトマト赤いトマト夕べ一とき畑へ皆出る

酒井空史

横關碧樓

小西佛舎

一色如佛

佐々木味化

新納香樹

金井三頁

飯田鏝一

青木水仙花

我妻まじめ

太田鐵石

丸山素仁

風は、今もすゞしくあり、御澗水の水音は今も清ら
 かであつた。

仙洞御所は御庭がよろしい。此の一隅にある大宮
 御所は、さきごろ陛下の御宿舎となつたもので、こ
 こは近代的の設備になつてゐるらしい。仙洞御所の
 御池は、眞の池、行の池、草の池と名けて三つあ
 る。樹木はうつそうとして、まことにイウスイの境
 である。醒花亭、又新亭の二つの茶席も、よく其處
 を得てゐる。規則では、模寫を禁ずといふのだが、ア
 メリカのお客がさかんに寫眞をとつてゐるので、私
 も係の許を得て、二三枚のスケッチをこころみた。

或日は大阪から、神戸へ行つた。大阪では、翠
 江、勇、青草の三人に逢つた。京都から大阪へ來る
 と、人々の眼の光もちがふやうだし、脚のはこび方
 も違ふやうだ。とにかく、戦災後の復興といふ意氣
 込の活氣はすばらしいので、これは東京以上であら
 う。かうした空氣にふれることも亦、樂しみであ
 り、クスリでもある。神戸では、れいの瀧々亭に、
 信夫、夏木、谷衣、城雨郎など集つて、待つてゐて
 くれて、滴々の音の夜更けるまで話した。

或日は、京都の彌榮小學校で、小學校の先生方の
 爲に講演をした。小學校四年の教科書に自由律の俳
 句が載つてゐる、その取扱ひ方について、私の考を

ひるからひなたのうめひらく
 はりといとが指さき明るい雨ふり
 青い木の中の赤いさくら若葉、のお八ツにする
 その手みても老いて今も花摘んでゐられる
 日のかたむく頃の日まわりの大きな、保険屋さん
 産じよくの枕もとで見た馬追ひの青い青い熱だつた
 無事に歸つてすすけた厨も裏の梅咲く
 柿の芽もうこんなほぐれてあなたの思日か（草人忌）
 正月が月夜で梅咲いてゐてもどる
 とつたかにかがばけつのなかげつそりひきしほ
 こころ紺がすりきて障子洗つてゐてもみぢ
 温泉を出てとういすスリッパのさきのちよつと朝日が秋
 晴れわたる夕空が柿をもつてゐる
 どの家の柿の木も古くてお寺へちかみち
 青空蝶々焼跡へ建ててゐる
 焼跡の街に看板がでてきたこのごろ富士の雪
 山のとんがり雪のきて暮れ残るとんがり
 とんがり山枯野のみちを牛車ゆく
 しぐれのあとのまだふく風がやなぎのしだれ枝
 柿のついた柿の木あつて雪の日うちにある
 茶の木には茶の花と茶の實日だまり
 せなかながしてくれるといふへちまだなのへちま
 晋妻福原ほすすきの風笠白き馬のゆく
 これが近道しじみのある流れにそうてあたたかし
 草もちをつくときめそんなこんなで朝からひる

桐井あしひこ

米倉久枝

三野米子

白石黙忍冬

佐藤孝子

荻原 荻

小島胡市

相京晴樹

大平羽人

照井燈光

山田こころ

矢内樹一

細谷のぶき

はなしたのである。じつさい、今度の教科書では、
 「自由律俳句」を載せながら、それが「作文」とい
 ふ標題になつてゐる爲に——而して、實は、それが
 普通の「作文」ではなくて、詩の書き方、詩の一つ
 としての俳句の書き方を指導させようとしてゐるも
 のと思はれるから、小學校の先生方は、どういふ
 風にも其を取扱つていゝか迷つてゐることだらうと思
 ふ。けふは、きわめて小範圍の先生がただけの講義
 だつたが、私は今後、機會があることに、小學校の
 先生がたのために、かういふ談をしてあげたいと思
 つてゐる。

X

六月廿九日、層雲大會が催された。關西方面に廣
 く案内状を出したと見えて、出席の通知者が七十名
 にも及んでゐると聞いた。遠方からの參會者は一泊
 する要があるので、宿泊の用意もしなければならな
 い。出句をまとめてトウシ+版屋に渡さねばならな
 い、原稿を締切つてしまふあとから又、續々とく
 る。それを追加せねばならない、と、幹事はテンテ
 コマヒをしてゐた。そのうち、氣の早い人は前日か
 ら見える、で、その人のために又宿を心配せねばな
 らないといふ風に……。だが、これらは幹事にとつ
 ては楽しき忙しさであつたらしい。「大會」と稱する
 からは、なるべく盛會であることほどうれしいこ
 とはないからである。但し、梅雨空がハッキリとし

松ろ山は家のまへ沙になるとしじみとる後の川
 水底の砂も日がのびてゐる襪にて漕いで
 夏の夕は船の下の小魚乗せてもらはう
 まいた水こほり家の主として出てゆく朝
 雪か け ば 汗 ば む ほど な 雪 の ふ る
 東風が手のうちの本の頁をめくつてゐる
 川と山とが早春送電線に遠山はれてゐる
 いつか石の日が梅の木にうつつてゐてこんにち冬至
 家の前にも墓のあるそのあたり夢の芽
 びねの花や切炭する手あ手袋である
 かざゆきす日の中木守みかん一個二個赤い
 月があるらしくて庭のさくら山の松の中の櫻
 夢の穂しづくするほどの雨の朝やんでゐる
 梅の花に晝から出てゐる月、が光りもちてくる
 春の夕日がいっぱいうまやにうまのゐる
 小さなほこらが何もかも芽ぶくばかりの中
 訪ねてさくら掃いてあるところ散つてゐる
 梅の花あたたかな子供らのあそぶむしるが一枚
 老いてかえつてふるさとの山のやまびこ
 つぼみをもつた木蓮の木の下の石が月夜
 さくら並木道のさくら定時で退けてくる女工員たち
 梅のあとすぐ櫻の咲いたおいなさんおがみにくる
 穂が 出 た 夢 の 雲 雀 だ よ
 ほんに雪のやう白く咲いて雪柳といふ揺れてゐる
 若葉、水音について行く道の雨やみそうもない

村田白鵜

金平二火

堀切春扇

植田市籠

木野本鳥不止

佐藤鈴村

名雪理輝

藤野香紅花

善方牛臥城

鈴木折嶺

印南健治

青木青華

ない爲に、ドンヤ降りにもなつては困ると氣づか
 はれてゐたが、その點も大そう都合好く、當日は降
 らず照らすの涼しい日であつたのは幸だつた。

會場の高臺寺は、京都屈指の名刹であつて、本堂
 の凡そ八十疊敷ほどの廣間を用ひたから、清風座に
 満つといつた感じであつた。東京から、吉澤稻市、
 彌浩二、横濱から東松八洲雄、豊橋から内藤善知、
 宇和島から田中井夢、佐賀から山本木天齋、津山か
 ら原田赫城子、木村岩治等、福井から加藤如水、竹田
 附近から、井手滝郎、村尾草樹、岡田溟干、平位阿
 木、樋口草山、三田から泉恩三、宇治山田から親井
 壺牛花、岐阜から水谷青史、津島から池原魚眠洞、
 吉野から塚田虹子——これらは皆遠方から來た人た
 ちであつて、友アリ遠方ヨリ來ルマタ樂シカラズヤ
 と云つた風に、あちらに二三、こちらに三四と集つ
 て、或は稱讚を舒し、或は初對面の挨拶を、といふ風
 に胸襟を開いたる風景があちこちに見うけられた。
 句會の配事は、別に其の記があらうから、委しい
 ことは省く。互選、披講がすんだのが三時。今日の
 うちに歸る人もあらうからと、一旦散會をして後、
 泊る人は泊るとして更に尻をおちつけて、語ららし
 く、私は自分の宿舎に引揚げたが、夜にかけて、同
 じ高臺寺で、有志第二次句會が催されたといふこと
 であり、つゞいて夜更けるまで俳談討論がにぎわつ
 た。其夜は皆々ロクに睡らずして、短夜は早くも明
 けわたつたとか、後に聞いたのである。

花が散つて葉になつてほし物がかわいてゐる奥さん
櫻も山も暮れてくる汽車のふえ

武田 桂

手にもつて赤い桃の花は丘に咲いてゐる
ディーブと女と冬の太陽のオレンジのよう

松岡 蒼児

白梅二三輪は咲き音やはらかき石段をおり
（鎌倉後二さん居）
口あいて眠つてゐる人とねむれずゐる（車中）

水谷 青史

驚のはねも高い空夕日になる
二人ぐらしがしづかずぎる藤の花かうしてをる
冬夜盃もてば月があらう波の音する

上柿 小平

塔のまわり柳が雨にぬれて雨の塔である
テニスコートには女の白いすがた桐さく
ほうれん草の青い夕餉のめいめい皿が夫婦きり

物部 卓郎

赤ん坊の目が青葉が障子あけておく
つつじ山のおべんとうが一人であられる子に箸を
もうかげがはつきり夏だと思ひポストへはがき一枚

菅崎 道雄

焼跡青いものが匂うよな宵月が出て
よしすうすみどりの空をのぞかせて一雨そのコスモス
遠山まで透明な夕日がいろいろの芽をもつてゐる

天沼 棗人

これで花はおしまひになる雨ががらす戸
葉ざくら此頃病院になつて毛布ほしてゐる
炭は炭薪は薪と積んで咲きだした辛夷一本

遠藤 虹水

月がはるである夢ばたけ夢のひろびる風ふく
さくらと杉林と杉の秀さきに雲のゆく
風に帽子をとられまいインフレの街が花どき

下山 一水

若 年

井手 逸朗

このあひだ橋本健三氏から詩集「若年」をおくられた「若年」の中にはたしかに青春があつた。私はこんにち、このような青春を手にもつて眺め、さうしていま更に私に青春のとはく去つてしまつたことを想ひみるのであつた。

詩集「若年」の跋の中で健三はつぎのように書いてゐる。

「春、みどり色の草が大地をかざる頃になると、そのクロローバの原にいつも學生たちは集まつて校歌や應援歌を合唱した。彼らのこえは時として日暮近くまでつづくこともあつた。それらのこえはだんだんに熱してつひには皆涙ぐんで歌つてゐた。學生たちは皆溢れ出る自分たちの歌ごえに感激してゐた。青年というものは、このいもうたうてゐる自分たちのうたごえに泣くことの出来る人間をいうのだ。これは決して只一片の感傷かただけからきてゐるのではない」

ゆゆしくもここにかたられてゐる青春を私は自分のとほい追憶の中のうたごえの中におもひ出す。

草 心 健 三

吊橋の霜冬菜の霜、日のさし

佐々木行人

小さいながれをもち、戸口あけてゐる

今日の日は出たはつばはつば

日向野秀策

めしつぶもらうて旅のポスト

花のほひする風がランプのほのほ

鈴木芋村

そこばくの粗朶を買ひ雨に雪のまぢる

林のおく根雪となる月のあかるく

河重更涼

五七が雨の地雨になつて夢うれてゐる

このごろ女の受付も、蔦の青々とした中の窓口

こばたつを

風が大工のちらかしものを吹きちらかす垣根のきくの芽

太平洋はまこと廣いビイル池立てまいとついでもらうてゐる

森田十雨

あきらめるより外ない便りをたよりにしてゐたことでした

鏡と洗面器と、今日から六月になる鏡にうつてゐる

岡浩二

ほほえんで柿米などそなえられてえいれいになつとる

遺骨の箱の中にあるものをたしかめてからの夜の寒さとなる

青まさよし

ゆうべ雪ふる戦災住宅がみんなけむりあげてゐる

笠はげんげに上むけて雨やんで明るい

木立の中に秋の日さして池、正倉院へ通る

ふるさとの渚にをりて

きみを思ひてはげしけれど

きみがこころははかられず

ふるさとは

松の根方のはまひるがほよ

砂とあそべばなみだいづ

草をむしりてよとなかるゝ

岡野宵火の青春はいまちうどこのようにある。

私はこの人の青春を手にとつて眺めることをしよう

別れることをかいたてがみ、封をする

切手をはる

この「切手をはる」はいゝ。きまつたという感じが

ある。宵火の青春はいまここのところへきてゐる。

さりげなく別離をいうて萬目悲傷の心を封印しよう

とする。

月が出て月あかり處女である胸のふくらみ

少女の胸のふくらみを、すくなくとも宵火は目路の

高さにまでもつてきて、そこに月あかりを感じてゐ

る。このような月光は青春のうづきの中からでなく

ては出てこない。

秋いちんち晴れてた繪具箱のいろがごちやごちや